

---

# お嬢様とヴィンセント

じんぐうじあすか

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

お嬢様とヴィンセント

### 【Nコード】

N8678J

### 【作者名】

じんぐうじあすか

### 【あらすじ】

「ヴィンセント！ ヴィンセント！？」 森のお屋敷は今日もお嬢様の声が響き渡る。部屋から出られない“お嬢様”の突きつける無理難題に悩まされていた使用人、ヴィンセント少年はある日一つの提案をする。「僕が貴方の為に、貴方の物語を記しましょう」かくして“お嬢様”とヴィンセントの紡ぐ、奇妙な物語の日々が幕を開けたのでした。これは、不真面目な執事が描く、めくるめく“三流小説”の世界の物語。 2 / 15 : とりあえずまえがきか  
。5。

## まえがき（前書き）

不定期更新で、ちまちま書いてきます。文章量少なめ、全七話か八話予定です。

## まえがき

「ヴィンセント！　ヴィンセントはいないの！？」

森の奥にひっそりと聳え立つ巨大なお屋敷。そこでは今日もまた、お嬢様の声が響き渡る。森の動物たちも転寝したくなるような昼下がり、今日も彼女はご機嫌斜めだ。

街の人々は、決してこの屋敷に近寄ろうとはしない。何故ならば彼女の暮らす屋敷は深い森に包まれ、屈強な警備員が見張りに立っているからである。巨大な屋敷が聳え立つその様を、人々は“悪魔の城”などと呼んで近づく事を恐れていた。

そんなお屋敷の中の一番奥、そして屋敷の中で最も豪華で華やかで清潔で、広々としたお部屋の中……。広い広い部屋の真ん中、かつて某国の国王が座っていたという玉座に腰掛け、お嬢様は今日も足をばたばたと上下させていた。お行儀が悪いと執事が何度嗜めても、彼女はそれを聞き入れようとはしなかった。お嬢様は退屈が最大の敵であるお年頃、今日も暇だと足をばたばたさせる癖が出てしまふ。

「ヴィンセント！！　ヴィンセント！？　全く、わたしが呼んでいるというのに五秒で現れないなんて……とんだ使用人だわ。セバスチャン、ヴィンセントはどこ？」

執事の老人セバスチャンはお嬢様の為に紅茶を淹れている真っ最中。お嬢様愛用の、これまたかつて某国の国王が使っていたという乳白色の綺麗なカップに紅茶を注いでいた。黄金色に輝き湯気を立ち上らせる紅茶をそっとお嬢様に差し出し、セバスチャンは首をかしげた。

「さて、ヴィンセントはどこへ行ってしまったのでしょうか？ お嬢様が呼んでも現れないとは、珍しいですな」

「全く、あれは本当に駄目な使用人ね……！ セバスチャン、紅茶には砂糖をたっぷり入れてといつも言っているでしょう？ ミルクもよ！」

「しかしお嬢様、これは某国の国王への調度品であったという、格式高い紅茶でございます。紅茶本来の味を楽しむ為にも、ミルクと砂糖は……」

「そんなもんだだニガいだけの液体じゃない！ 甘くないなら要らないわ！！ それよりヴィンセントは？ ヴィンセントはどこなの！？」

紅茶をカップごとセバスチャンに投げ返し、お嬢様は椅子の上立って叫んだ。すると部屋の扉が開き、ひょっこりと一人の少年が顔を覗かせた。眼鏡をかけた、いかにも人当たりの良さそうな少年である。良く言えば優しそうな、悪く言えば頼りなさそうな顔立ちだ。少年はお嬢様の前まで近づくとぺこりと一礼し、それから首をかしげた。

「お呼びでしょうか、お嬢様？」

「ああ、ヴィンセント！ お前は どうして いつも そう 役立たずなの！？」

「お言葉ですがお嬢様、 “今日は” 僕は “まだ” 何も失敗はしていませんが」

「私が呼んでいるのに五秒で現れない事が、失敗以外の何者だつて言うの!？」

そんなお嬢様の無理難題を突きつけられるのもヴィンセント少年にとつては日常茶飯事……。一日三回ご飯を食べるように、そしてそのあとには歯を磨くように、ごくごく当然の事である。紅茶をかけたセバスチャンも特に怒る様子も無く、顔をハンカチで拭き拭きしていた。

「お嬢様、椅子の上に立つのはお行儀が悪いですよ。椅子は立つものではなく、座るものです」

「あら、東方の蛮族は椅子でも食べると言うじゃない？ 四本足ならば何でも食べると聞いたわ。全く、本当に困ったものね」

わけのわからない事を口走りつつ、お嬢様は素直に椅子の上に座った。そうして足を組み、玉座の上にふんぞり返ってみせる。まるで博識をひけらかしたかのように勝ち誇った顔をしているお嬢様の様子にとりあえず少年も合わせる事にする。

「全く、困ったものです。東方の人間は、タコやイカも食べるそうですよ。魚も生で食べるんだらか」

「あら、タコモイカも美味しいじゃない？ 何が変なのかしら？」

「アレッ!？ いやまあ……。それで、どのようなご用件で？」

ヴィンセントの疑問にお嬢様は頷き、再び玉座の上に立つ。そうして長い髪をふわりとかきあげ、目を瞑って言った。

「わたしを見なさい、ヴェンセント!」

「はい、ばっちり見ていますよ」

「で!？」

「……………。で…………!？ と申されましても。お嬢様は今日もお嬢様でございますが」

「そう、そうなのよ。わたしっいたら今日もとっても可愛くて、とっても素敵なお嬢様! ピンクのドレスもブロンドの髪も、サファイアのような瞳も全てが完璧! なのにおかしいとは思わない? いいえ、おかしいの!」

「はあ。何がでございますか?」

「今日も何一つ、面白い事がないのよ!!」

一頻り叫んだ後、満足したのかお嬢様は椅子の上に再び収まった。貧乏ゆすりをしながら退屈そうにほつぺたを膨らませるその様は子供そのものだったが、ヴェンセントはあえて何も言わなかった。思ったことを口にしない…………それは彼がこの数年で学んだ真実である。

「お父様ったら、今日もわたしを外に出してくれないのよ!? 酷い、酷すぎるわ! お母様は朝から晩まで勉強、勉強っつうるさい…………。ねえヴェンセント、屋敷から今直ぐ連れ出して頂戴!」

「今直ぐでございますか?」

「五秒以内よ」

お嬢様の時間の単位はどうかやら五秒ずつらしい　そんな事を考えつつ、ヴィンセントは頷いた。しかしそうは言われても無理難題もい所である。

「お言葉ですがお嬢様。外の世界に行けば楽しいとは限りませんよ？　街の人々は僕たちの事を嫌っているようですよ」

「でも、この部屋の中でじっとしているよりはずっとましだわ」

「お嬢様、部屋の中でも楽しめる事はいくらでもありますよ。例えば読書……。読書などはいかがでしょう？」

「読書なんて飽き飽きだわ。同じ本を何度も何度も……。それに父様が買い与えてくれる本はどれも刺激が少なくてあくびが出ちゃう。ねえヴィンセント、貴方は面白い本を知っているの？」

「自分で言うのもなんですが、僕は結構な読書好きです。お嬢様に紹介できる本も少しはあると思いますよ」

「でも、それじゃあ駄目よ。だって人と同じ物を読むなんて……。わたしは特別なんだから、特別に私の為だけの物語があってもいいと思わない？」

お嬢様は常に自分を特別だと思いついでいる。実際彼女は特別なのだが……。何はともあれ、彼女が好きなものは“某国の国王が使っていたシリーズ”と、そして“自分の為だけに作られたオーダーメイド”だったのである。お嬢様がそんな反応を見せるのは少年もわかりきっていた。故に少年は人差し指を立て、こう提案した。

「では、お嬢様が部屋の中においても様々な物語を楽しむ事が出来るように、僕が今日からお嬢様の為の物語を書いてきましょう」

「私の為の……？」

「はい。物語のルールは以下の通りです」

ルールその1……登場人物の中に、必ず“お嬢様”が存在する事。  
ルールその2……お嬢様が飽きないように、毎回一話読みきりの短編である事。

ルールその3……やはりお嬢様が飽きないように、毎回そのジャンルを変更する事。

「と、こんな具合でいかがでしょうか？」

「まあ、それは名案だわ！ ヴインセントのくせに素敵な考えね！  
部屋の中にいながら、沢山の物語を体感できるなんて！」

「つきましてはお嬢様、僕に少々執筆の時間を頂きたいのですが。  
具体的には朝の掃除と夕飯の支度、それからお嬢様のお菓子の買出しを免除していただきたいのです」

「全然問題ないわ。そんな事は他の使用人に……そうね、セバスチヤンにでもやらせるもの」

「な、なんですとっ!？」

老人が驚き、仰け反っている間にヴインセントはニタリと黒い笑

顔を浮かべた。こうして少年とお嬢様との間に一つの協定が結ばれたのである。

「では時間を決めましょう？ ヴィンセント、貴方は毎日夕方の四時四十四分四十四秒に私の部屋に訪れ、物語を披露なさい」

「かしこまりました。夕方の四時四十四分四十四秒ですね」

「五秒でも遅刻したら、貴方には重い罰を与えますからね！」

ヴィンセントは適当に返事をし、そのまま部屋を去って行った。お嬢様は楽しげに椅子の上で笑顔を作り、明日が待ちきれないのかばたばたと足を上下させる。そうして部屋の隅に立っていたセバスチャンを指差し、言うのである。

「セバスチャン、ヴィンセントの代わりに今直ぐお菓子を買ってきて頂戴！ 隣町にある、某国の王が大好きだったというとっても美味しいクッキーがいいわ！」

「お、お嬢様……」

「いいから早く行きなさい、このノロマ！」

クマのぬいぐるみを投げつけられ、セバスチャンは泣きながら部屋を飛び出していく。こうしてお嬢様とヴィンセント少年の、奇妙な一週間が幕を開けるのであった……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8678j/>

---

お嬢様とヴィンセント

2010年10月8日14時10分発行